

Contents

読書のすすめ2014.....	2
海外博物館事情.....	10
11月12月の特別展等	12
リニューアル情報.....	14
トピックス.....	15



読書のすすめ2014

～博物館員がつくる本～

一冊の本を作るのは、とても骨が折れる。日々の仕事を山ほど抱えている博物館員ならば、本を作るんだという強いモチベーションを持続させる工夫が必要だ。

今回6回目となる「読書のすすめ」特集では、志の高い博物館員が作った30冊の良書を紹介する。豊かな専門性や地域性を見事に一冊に編んだものから、経験に基づいた展示・研究・資料収集のノウハウをまとめた、すぐに見えるものまで幅広い。選書は、10名の博物館員と、博物館関係の2団体の方をお願いした。

SNSなどの迅速な情報発信が目される昨今、博物館員が時間と労力をかけて“紙の本”を出版する意味を考えるきっかけになればとも思う。

(本誌編集委員 畠山 泰英)



飯沼 一雄

船の科学館

船の科学館では、海や船に関する資料を多数発行しているが、中でも「資料ガイド」シリーズは、主要な資料を豊富な図版等で分かりやすく解説したもので人気が高い。1冊300円と手軽に購入できることも要因だが、他では取り上げ難いテーマであることも影響していると思う。12のシリーズ中、是非ご紹介したい一冊が本書である。

『船の科学館 資料ガイド11 につぼんの海(改訂版)』

■山田吉彦 著／船の科学館 2013年

昔から学校で「日本は狭くて資源の乏しい国と教わってきた。しかし、海に視点を移せば、領海とEEZ(排他的経済水域)を合わせて447万平方キロメートルにも及ぶ世界有数の海洋国家ということになる。そこには、水



産、鉱物、エネルギーなど莫大な資源が眠っているが、この知っているようで知らない日本の海の最新情報を多数の図版と写真で分かりやすく解説したのが本書である。本年9月、ようやく政令決定されることになった大陸棚延長に関する国連大陸棚限界委員会の承認の経緯についても触れられている。

『平賀 譲一名軍艦デザイナーの足跡をたどる』

■東京大学平賀譲研究会・大和ミュージアム 編

／文藝春秋 2008年

平賀 譲と聞いてもご存じ無い読者が多いと思う。明治生まれで東大総長を務め、軍艦総長と呼ばれたようにむしろ日本海軍の軍艦デザイナーとして世界的に著名な人物だった。不譲(ゆずらず)と揶揄されたように、妥協のない性格だったという。実は、本書と共に膨大な関係資料が、東京大学と呉市の大和ミュージアムの共同作業により整理され「平賀 譲デジタル・アーカイブ」として公開されたが、なんとセキュリティ問題で本年5月突如公開が休止されてしまった^{注1}。アナログな筆者は、「だからデジタルは…」と愚痴の一つもこぼしたくなるが、研究に欠かせない貴重な資料だけに一日も早い再開を願いたい。

『横浜港ゆかりの船』

■横浜みなと博物館 編集・発行 2014年

「横浜開港150周年」にあたり、同館の3人の学芸員が分担執筆し、神奈川新聞に都合77回連載した記事を、加筆修正し取り纏めたものが本書である。この連載を「横浜港ゆかりの船物語展－黒船からクルーズ客船まで－」と題して特別展を開催し、図録としても活用したのだからうまく考えたものである。港と船はいわば恋人同士、横浜に関わる恋人たちの物語が見開き2ページ毎に綴られていて、いわば昔気質の船乗りの肩ふり話を聞いているようで味わい深く読み飽きない。



内尾 優子

国立科学博物館

『まいごのぴーちゃん きゅーはくの絵本①花鳥文様』

■九州国立博物館 企画・編集／フレーベル館 2005年

子どもたちにとって、何も前情報なく博物館などの文化財資料を見学することは、少々興味を持ちづらいかもされない。そんなときにこの絵本は見学の楽しい視点を教えてくれる。主人公はお皿の花鳥文様の絵柄の小鳥で、迷って旅するストーリーになっている。迷子の間に、様々な文化財を巡って、たくさんのキャラクターと出会う。読み進めるうちに、自然に文化財に触れることができる。博物館で改めて実物を見たときには、すでに親近感がうまれているのではないだろうか。本の終わりには出会った資料の解説もあり、大人でも楽しめる一冊。

『自然科学30のなぜ? どうして?』

国立科学博物館の展示から』

■国立科学博物館 編著／さ・えら書房 2010年

博物館の常設展示には解説がつけられているが、スペースなどの制約から内容がシンプルにされることも多い。だが本当は、それぞれの標本や資料の背景にある出来事や展示となる重要な理由、そして、展示と展示の間のストーリーを、展示を用意する側

としては見学者にぜひ届けたい。それを叶えているのが本書。国立科学博物館の常設展示について、標本や資料にまつわる話を味わうことができる。展示を見てから読む、読んでから再度展示を見る、どちらも改めて深く展示を楽しむことができるように、実際に展示にも携わる担当研究者が執筆している。展示の背景にある「なるほど」をたっぷり得られる一冊。



『小さな骨の動物園 Zoo for Small Creatures: the Amazing World of Bone Specimen』

■INAXギャラリー企画委員会 企画／INAX出版 2005年

骨はその形自体が大変興味をひくものである。過去にも骨についての展覧会が各博物館でも行われているように、やはりその自然のデザインの美しさ、神秘さに惹きつけられる。本書も標本の写真が美しく、骨の魅力を視覚に伝えてくる。さらに、骨に魅せられている人々の活動や海外博物館の標本作製など、骨にまつわる様々な話が紹介されているところも魅力的。2005年から2006年にかけてINAXギャラリー（現在:LIXILギャラリー）で行われた展覧会の図録だが、この本単独でもかなり楽しめる。手元に置いて何度も見たくなる一冊。



内方陽子・小幡和男・鷺沢美穂子

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

ミュージアムパーク茨城県自然博物館では、茨城の風土に根ざした自然に関する調査研究や資料収集を行っています。当館からは、日本国内や茨城県内といった身近な動植物について知ることができる3冊の本を紹介します。

『地球再発見 いばらき自然ものがたり』

■ミュージアムパーク茨城県自然博物館 編集
／茨城新聞社 2014年

2009年4月から2013年3月までの4年間、茨城新聞の若者向けページ「KiRAっと!」において、当館の学芸員が毎週交代で執筆を担当し、茨城の自然についての連載を行いました。本書は、その199回の新聞連載の中から144回を厳選し、最新の情報を加筆・訂正したもので、動物・植物・地学の分野にわたって、茨城県の自然の魅力が満載の一冊となっています。博物館20年の調査・研究の成果を存分にお楽しみください。



『茨城の動物たち 教師の卵 フィールドにでる』

■久松正樹・竹内正彦・増子勝男 編集／STEP 2012年

県や市町村など地域の自然誌を扱った出版物は種々ありますが、報告書の形がほとんどで、まして、読み物として楽しく読みながら知識を深めることができるものは多くありません。茨城県でも、県内に生息する動物についてまとめられた本はほとんどなく、この点で本書は画期的な出版物といえます。

著者の多くは茨城大学教育学部動物学研究室の出身で、学生時代から県内でいろいろな分野の動物を研究している15人です。この本で初めて明らかにされるような成果も多く、茨城の動物について詳しく知りたい人、特に、これから研究を始めようと考えている中高生には欠かせない一冊です。

『ウォッチング日本の固有植物』

■岩科司・海老原淳 編集／東海大学出版部 2014年

世界で日本だけに分布する「固有植物」。本書は「読みもの」としてわかりやすく固有植物を知ることができる貴重な一冊です。国立科学博物館を中心とした16名の研究者による33話が掲載されていますが、各研究者自身が研究対象としている植物や菌類を紹介していますので、その言葉には重みと情熱が宿っています。また、最先端の植物分類学ではどのような研究が行われているのかを垣間見ることが出来ます。博物館で行われている研究に興味がある人にぜひ読んでほしい一冊です。



内田 暁友

斜里町立知床博物館学芸員

自分の身近にまったく知らない別世界があると最初に気付いたのは、小学生の高学年のころだ。都会の学校で猫の額のような花壇を整備をする係だった私は、開封した腐葉土の袋のなかで動き回る土壌動物たちを発見し、その鮮やかな色彩や不思議な形に息をのんだ。知らなければ知らないままで一生を終えることもあり得る、そんな別世界がすぐ隣り合って（物置の肥料袋にさえ）存在することに驚き、この世の秘密の一端に触れたような気がしてドキドキしたものであった。

別世界への扉を自分でみつけて開けてしまう幸運な例もあるが、多くは図鑑や図譜といった本が扉の場所を示してくれたのではないか。今や我々は土中のみならず海中や高山、そして上空にも魅力的な生命や現象が溢れていることを知っている。ページをめくると現れる美しい線画や写真、驚きの記載は先人が生涯をかけた自然誌研究の成果だ。それらを椅子に座ったままに享受し、あこがれの鉱物や生物、気象現象に思いを馳せることができるのだ。この快楽をむさぼる行為を、罪悪感に駆られつつもゆめゆめ怠ってはならない。それは新たな別世界を発見するための大事なトレーニングも兼ねているのだから。

気がつくと私は博物館の学芸員として別世界を記録する側になっていた。記録も標本、記載、スケッチ、写真、2-3Dスキャン、音声、動画と選べる時代だ。これらを整理し、別世界通信として提示するメディアとしての本は、改めてそのメリットがどこにあるのか問い直されている。PDFでくれという声を無視してインクをなすりつける紙の束が、懐古趣味ならまだしも手慣れた仕事をこなすだけという結果にはしたくないものだ。

NOMURA <http://www.nomurakougei.co.jp/>

Prosperity Partner
NOMURA
世界に、歓びと感動を

株式会社 乃村工藝社
本社：東京都港区台場2-3-4 TEL：03-5962-1171(代表)

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営



株式会社 丹青社 〒110-8549 東京都台東区上野 5-2-2
TEL. 03-3836-7221(代表) www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

『知床の高山植物(第2版)』

■内田暁友 著/知床博物館協会 2013年

花の図鑑は百花繚乱の状態ではあるが、まだまだ紙の図鑑でも野外での使い勝手を上げる余地は残っているように思う。「ガラパゴス化」と同じ道といえなくもないが。

『獣の標本作製ガイド解剖編(改訂版)
：道ばたから収蔵庫まで』

■西澤真樹子 編/なにわホネホネ団事務局 2009年

泣く子も笑うハウツー本。読めば新世界に連れて行かれる。博物館資料が愛でできていることを改めて教えてくれる。

『醤油鯛』

■沢田佳久 著/アストラ 2012年

コレクションの創造は別世界の創造だと確信させてくれる。『鉄塔 武蔵野線』と並び称されるべき奇書といえよう。



大石 和江

東京理科大学近代科学資料館

『実物でたどるコンピュータの歴史
～石ころからリンゴへ～』

■竹内伸 著/東京書籍 2012年

日本一の計算機コレクションを持つ東京理科大学近代科学資料館所蔵の計算機の実物の写真とともに、計算機の歴史をわかりやすく解説した本である。図録の代わりとして使用できるようカラー写真を豊富に掲載し、展示物のキャプションや当館に残る資料をもとに私も協力して編集を行った。コンピュータの技術者でも専門家でもないため、考証に苦労したが、多くの人に知ってもらうためには様々な種類のコンピュータの本が存在することに意義があると助言をいただき完成した。コンピュータは難しいと思う人も多いだろうが、「石ころからリンゴへ」というサブタイトルをつけて主に高校生を対象とした。



『ダイオウイカ、奇跡の遭遇』

■窪寺恒己 著/新潮社 2013年

2013年夏、話題になった“かはく”の特別展「深海」を記憶している方も多いのではないだろうか。人

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1874

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks

株式会社 東京サイエンス

TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745

http://www.tokyo-science.co.jp

E-mail:info@tokyo-science.co.jp

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

Panasonic

パナソニックだから、
可能なソリューションがある。



Core Products

Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution

マーケティング・セールス
システムインテグレーション
設置・施工
保守・メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

パナソニック システムネットワークス株式会社 システムソリューションズジャパンカンパニー

詳しくはホームページで panasonic.co.jp/avc/psn/ssj/

気の定番と言われる「宇宙」「恐竜」ではなく、少々地味なイメージのある「深海」が大盛況になった理由は、TVなどのマスコミの影響ではないかと思っていた。しかし、この本を読むと、ダイオウイカの長年の研究成果があってこそ深海や深海生物の真の魅力が展示の中にちりばめられ、訪れる来館者を魅了し、さらに口コミで評判となり、来館者が増えたのだと納得できる。研究の奥深さを伝えることの大切さを科学系職員として改めて教わった気がする一冊である。

『江戸時代の科学者』全4巻

■西田知己 著 たごもりのりこ 絵／汐文社 2014年

当館では豊富な江戸時代の理学、算学に関する書物を所蔵しており、子ども向けの分かりやすい手引書を探していた。あるとき本書を図書館の子どもの本コーナーで見つけ、かわいらしいイラストと詳しい解説に惹かれ、そして国会図書館を中心に多数の図書館や資料館で所蔵している古文書や資料の画像が小さいながらも鮮明に掲載されていることに驚いた。現代の科学のルーツを知る際、江戸時代にはどのような科学があったのか、またどのような科学者や数学者、天文学者がいたかを知るための手引としてお勧めの一冊。



佐藤 武宏

神奈川県立生命の星・地球博物館

『授業技量を高める1

博物館活用で理科授業を改革する』

■岡田篤・水谷恒雄・澤野誠 共著／明治図書 2008年

「博物館が作った本」ではなく「博物館で作った本」というべきだろうか。

展示を理解してもらおう補助ツールとしてワークシートを用意している博物館も少なくないだろうが、ワークシートづくりの最大の悩みどころはどのような来館者をターゲットとするか、ではないか。本書は、私立小学校の教諭が小学生向けにワークシートを作っていく、その試行錯誤の記録である。逆に博物館としては、小学生に対して展示を使って何をどう伝えればよいのかを考える大きなヒントになる。ややケーススタディに偏っているのはやむを得ないだろう。

『博物館でまなぶ 利用と保存の資料論』

■八尋克郎・布谷知夫・里口保文 編著

／東海大学出版会 2011年

「これまでの博物館資料の研究は博物館技術学にかたよっていた」という文から始まるように、そもそも博物館資料とはどういったものか、なぜ博物館は展示資料の何十倍もの資料を集めるのか、そして、その資料



出典：東海大学出版部

— ご希望の恐竜・化石・動物・人類の
標本及び模型を探しご案内いたします —

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長—10m



株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8

TEL:03-5927-8356 / FAX:03-5927-8357

e-mail: sizensi@shibayama.co.jp

http://www.shibayama.co.jp

最先端3D天文シミュレーションと
高解像度+高コントラスト映像によるクラス最高のフルドーム映写システム!!

MEDIAGLOBE-III (メディアグローブIII)

「メディアグローブIII」は定評のあるコンパクトな本体設計を受け継ぎながら、小型ドーム対応した単眼映写方式においてトップレベルの解像度(ドーム直径方向1536ピクセル)とコントラスト比(最大200,000:1)を実現しています。映像品質を決定づける映写レンズには、コニカミノルタの優れた光学技術を駆使した新開発のドーム映写専用高精細フィッシュアイレンズを搭載。さらに新機能として「映像歪み補正機能」を採用しており、「メディアグローブIII」本体をドーム内の壁面近くに設置しても、映写映像を電子的に補正することでドームスクリーン全体に正確な全天周映像を映写いたします。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒170-8630 東京都豊島区東池袋3-1-3

大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階

東海事業所 〒442-8558 愛知県豊川市金屋西町1-8

URL: http://pla.konicaminolta.jp



TEL (03) 5985-1711

TEL (06) 6110-0570

TEL (0533) 89-3570

は誰がどのように利用するのかといった問題にあらためて切り込んだ好著である。フィールド調査と資料収集の関連については、滋賀県立琵琶湖博物館の事例紹介が中心となっており、もう少し踏み込んだ議論をしてほしいと思わないでもないが、それは個々の館の館員が考えよ、ということなのかもしれない。見かけのコンパクトさに反して、硬派で非常に読み応えのある一冊である。

『フィールドワークの達人』

■ 神奈川県立生命の星・地球博物館 編
／東海大学出版会 2010年

自館の書籍も一冊紹介せよ、とのことなので、面映ゆい思いで本書を紹介する。本書はもともと当館友の会会員への「フィールドワークへ出かけよう」という誘いを目的として企画された。自然に興味はあるのだが何をどうしたらいいのかわからないという人に対して、最初のとっかかりになればとの気持ちを込めている。博物館から友の会会員へ、という最初の思いが尾を引いてやや楽屋落ち的な部分がないわけではないが、失敗談だらけの実体験がたっぷり盛り込まれていて、ドタバタ気分を味わいながら一気に読める異色のハウツー本である。

 **友田 暁子**
千葉県立中央博物館

当館図書室で毎年何百冊と受け入れている博物館刊物のなかから、誰でも楽しめるように分かりやすく書かれた、生きものがテーマの展示解説書3冊を紹介する。

『図鑑大好き! あなたの散歩を10倍楽しくする
図鑑の話』

■ 千葉県立中央博物館 監修
斎木健一・土屋健 編著
／彩流社 2014年

本書は当館企画展の公式展示解説書を兼ねて発行された。現在入手できるものから、入手困難な稀少



図鑑や思い出の図鑑まで、生きものに関する様々な図鑑が紹介され、その楽しみ方・選び方・使い方のヒントになる話題を提供してくれる。作る人・使う人へのインタビューでは、製作の裏話、図鑑の楽しみ方など、それぞれの図鑑へのこだわりや愛着が感じられ、図鑑への興味を広げてくれる。

『ハチまるごと! 図鑑 : 第43回特別展

「のぞいてみよう ハチの世界」解説書』

■ 大阪市立自然史博物館 編・発行 2012年

この一冊でハチのことが分かる。全ハチ目の主だった分類群の解説、ハチを利用した生物防除、外来種拡大の問題など、ハチに関する知識が得られるうえ、ハチの多様で意外な生態も楽しめる。コンパクトなサイズなのに、写真も説明も豊富。専門用語は多いが、図説され分かりやすい。各解説がほぼ1ページ以内にまとまっていて、好きな箇所だけ読むこともできる。

『考えるキノコ

: 摩訶不思議ワールド(INAX Booklet)』

■ INAX出版 2008年

本書はINAXギャラリー(現在:LIXILギャラリー)巡回企画展に併せて発行された。色鮮やかで独特な形のキノコの写真や生態解説、和洋博物誌に掲載されたキノコ図譜、アートや文学におけるキノコのイメージなど、キノコの美しさでまとめられ、かつ、コンパクトだがポイントを押さえた説明が施されている。また、古今東西のキノコ研究の系譜、研究者列伝では3タイプの研究者が紹介され、キノコ研究者の執念が感じられる。

 **濱田 浄人**
国立歴史民俗博物館

ICOM規約では、博物館を、「humanity and its environmentに関する有形・無形の遺産を扱う機関」と定義している。この英語を、単に「神羅万象」とでも訳してもいいのかもしれないが、humanityという言葉が特出しされていることを考えると、「人間について、また、人間と関わりあう限りの全ての事柄について」とでも訳した方が適切に思

えてくる。

博物館にとって、「人々」は、博物館活動等の受益者、または積極的参加者というだけではないのだろう、博物館というのはその存在全てにおいて人間中心主義であるのだろう、と思えてくる。人間がいかに大事なものであるか、人間をとりまく事柄を見つめることがいかに貴重なのか、そんなことを感じられる博物館に出会うということは幸いである。

『放課後博物館へようこそ』

―地域と市民を結ぶ博物館』

■浜口哲一 著／地人書館 2000年

平塚市博物館の開館以来、地域博物館活動に取り組んでこられた故浜口哲一氏が、地域、それも漠然とした地域ではなく、地域住民の生活や地域住民の課題にどのように向かい合ってきたのかが綴られている。博物館、そして学芸員が、学術的な専門性を活かしつつ、地域住民と協働して地域に新たな価値を生み出していく様子は眩しくある。

『シンポジウム 人間と鉄 総集編』

■(財)鉄の歴史村地域振興事業団 編集・発行 1991年

本書は、島根県飯石郡吉田村(現雲南市)で鉄の歴史博物館等を運営する(公財)鉄の歴史村地域振興事業団が、1986年～1990年に開催したシンポジウムの報告集である。近代初期までたたら製鉄で栄えた吉田村は、その後、炭作り産業も失われ過疎に苦しんでいたが、鉄づくりの歴史と文化を再発見し、1986年には、鉄の文化を保護、継承することを目的として鉄の歴史村宣言を行った。英国科学博物館長をはじめ、理系・文系様々の方々によるシンポジウムの様子を見ると、鉄の村である郷土に向かい合う喜びが感じられる。



『3・11から考える「この国のかたち』

―東北学を再建する』

■赤坂憲雄 著／新潮社 2012年

東北学を提唱してきた福島県立博物館長の赤坂憲雄氏による本書は、未曾有の大災害となった東北から、人々の暮らしを見つめなおす意思表示の書である。3・11を風化させず、総合的な取り組みとして地域に向かいあうことの大切さを感じる。直接、博物館の姿は出てこないが、学際的な、そして人々の暮らしに根ざした学問としての東北学の再建は、博物館活動に共通するところがある。



米澤 里美

認定NPO法人大阪自然史センター

認定NPO法人大阪自然史センターは、大阪市立自然史博物館のミュージアムショップの運営やワークショップなどの企画を通して自然の魅力を伝える活動を行っている。ショップでは博物館のオリジナル書籍をはじめ、近隣の博物館施設や自然史系の団体などが作っている書籍を積極的に取り扱っており、自然の情報を発信する側と受け手側をつなぐ役割を担いたいと考えている。その中から、博物館施設の本を3冊紹介したい。

『むしのうんこ』

■伊丹市昆虫館 編 角正美雪 構成・文／柏書房 2005年

「いきものは、食べて、うんこをする」。そんな生きている証から、昆虫の世界をのぞいてみた一冊。学芸員が飼育展示にたずさわっている昆虫館だからこそ、集めることができた観察記録や写真が新しい発見を与えてくれる。ナミアゲハが卵から孵ってチョウになるまでにした一生分の“うんこ”のページが圧巻。

『はじめての標本づくり』

■きしわだ自然資料館 2001年

はじめての人向けに工夫されたイラストと文章で、植物・昆虫・貝・化石・岩石の採取から標本づくり、保管の方法ま

で、丁寧に紹介されている。夏休みの自由研究で困っている子どもたちを念頭に置いて作られた本だが、学術研究や新種の記載、環境保全を考えるうえでも、標本が役立つことにも触れられている。正しく作られ保管された標本は遠い未来につながることができる。はじめて標本を作る人にも、そんな可能性を与えてくれる本である。

『ホネで学ぶ、ホネで楽しむ 第39回特別展解説書』

■大阪市立自然史博物館 編 2009年

大阪市立自然史博物館の所蔵標本を中心にたくさんのお骨が紹介されている。全身骨格や頭骨の写真に加え、哺乳類の「肩甲骨」や「寛骨」、鳥類の「胸骨」、カエルの「腸骨」ばかり並んだページがあり、骨の同定や比較に便利である。また、標本の作り方や、骨から分かる病気やケガの跡、年齢や性別を見分ける例などもあり、楽しく学べるポイントが見つかる一冊となっている。



綿貫宏史朗

NPO法人市民ZOOネットワーク 理事

NPO法人市民ZOOネットワークでは、市民の立場から動物園のことを理解し、動物園をより良いものにすべく活動を行っている。今回の書評特集のテーマは「博物館が作る本」ということだが、動物園も博物館の一種である。動物園への理解がより深まる書籍を紹介したい。

『いま動物園が
おもしろい
(岩波ブックレット)』

■市民ZOOネットワーク 著
／岩波書店 2004年

この本が発行された2000年代初頭といえば、



“行動展示”で世界的に有名となった旭川市旭山動物園が注目され始めた時期だ。人々の関心が再び動物園に向かい始めたこの頃ならではの内容で、来園者である市民の視点から、動物園の持つ「教育」や「研究」「動物福祉」といった役割について分かりやすく述べられている。気軽に手に取れるブックレットタイプの本であり、動物園に興味を持ち始めたすべての人に推薦する。

『動物園学入門』

■村田浩一・成島悦雄・原久美子 編／朝倉書店 2014年

近年、動物園に関わるいくつかの翻訳本が出版されてきた。最新の欧米の動物園による示唆的な知見が盛り込まれる一方、どこか「日本の現状に必ずしも合致しない」というむずがゆさも感じていた。そんななか、日本人の動物園関係者総勢52名の執筆者によって生み出されたのが、本書だ。

「動物園とは何か?」という問いに始まり、その歴史、飼育管理や獣医療に関する総論・各論、保全、教育、さらには動物福祉や経営といった側面にまで至る。動物園に関わるあらゆる学問領域を包括した「動物園学」を発展させる機動力となるだろう。動物園について学び始める入門書として、あるいは、より深く考えるための参考書としても、手元に置いておきたい一冊だ。

『霊長類ガイドブック』

■財団法人日本モンキーセンター 2012年

日本モンキーセンターは霊長類に特化した動物園（世界最多の67種のコレクションをもつ）であり、動物園としては珍しく登録博物館でもある。2014年4月には公益財団法人化し、従来以上に動物の研究・教育・保全・福祉に取り組む動物園として新たなスタートを切った。このガイドブックは、動物園見学のお供としてはもちろん、霊長類のからだ・くらしなどの解説や写真も豊富で、霊長類への理解を深める図説としても十分だ。モンキーセンターに訪問の際は必ず購入したい（通信販売でも購入可）。

注1

平賀譲デジタルアーカイブは2014年10月10日にサイトリニューアルしています。新サイト <http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/hiraga2/>



■ 特集 気候変動の企画展・特別展

バハマ大学で、気候変動展を開催中

「小島嶼国は極めて気候変動と海面上昇の影響を受けやすい。最悪の場合、移住と再定住を考慮する必要がある」(気候変動に関する政府間パネル-IPCC)。カリブ海、インド洋、太平洋、地中海などの海拔の低い島国や環礁では海面上昇の影響に対して特に脆弱となっている。カリブ海のバハマ諸島も、最高地点がわずか63メートルしかない(キャット島のアルベア山)。故に海面が50センチから1メートル上昇すると、海岸に接した人々の生活圏の大部分が完全に海面下に沈んでしまう。これによって、住民の被害と社会インフラは甚大な被害を受けることが予想されている。

バハマ国の首都ナッソーにあるバハマ大学では、気候変動をテーマにした企画展が2014年5月から8月にかけて開催された。同展は、バハマが気候変動による水没の危険にされている実態を訴えており、特にバハマの若い国民を対象に、バハマが誇る世界一美しいサンゴ礁を見に来る外国人観光客が落としているお金でバハマの経済が支えられており、且つ気候変動によって水没しかねない危険にさらされていることを知ってもらうことをメッセージとして伝えていた。

会期：2014年5月8日～8月1日。

Consumers, Corals & Climate Change.

The College of the Bahamas - Pro Gallery, Nassau.

南チロル考古博物館で、気候変動展を開催中

ヨーロッパのアルプスの山々は、造山運動によって中生代に形成され、新生代第四紀にはアルプスの全域が氷河に覆われた。近年その氷河から多くの貴重な考古学的発見が続いている。中でも、1991年にオーストリア・イタリアの国境のエッツ渓谷の氷河で見つかった、約5,300年前の男性のミイラはその最大の目玉である。その後、多くの考古学的発掘の成果により、長い氷河期における地球的規模の気候変動の実態がだんだんと明らかになってきた。

エッツ渓谷で発見されたこの男性のミイラは、現在国境のイタリア側の町ボルザノにある南チロル考古学博物館で

展示されているが、同館で、現在「氷に閉じこめられた物語：アルプス氷河の考古学的発見」と題した企画展が開催されている。同展では、アルプスでの考古学的発見を使って、考古学的観点から気候変動の解明を試みている。

会期：2014年2月25日～2015年2月22日。

Frozen Stories - Discoveries in the Alpine Glaciers.

South Tyrol Museum of Archaeology, Bolzano.

<http://www.iceman.it/en/museum-information>

https://www.youtube.com/watch?feature=player_embedded&v=r8TezXAtbfA

ロンドン自然史博物館で、気候変動展(写真展)を開催

ブラジル出身のセバスティアン・サルガード(1944年生まれ)は、ドキュメンタリー写真・報道写真の分野で活動する世界的な写真家である。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの発展途上国を回り、貧困、飢餓、過酷な労働、難民、内戦などを多く写したことで知られ、それらの写真は展覧会として日本でも東京国立近代美術館、東京都写真美術館等で紹介されてきた。

近年サルガードは気候変動について強い関心を持ち、2004年から8年の歳月を通して、32ヶ国で気候変動の影響を強く受けている状況を写しており、それらが「ジェネシス」と題した国際巡回展として世界各地をまわっている。ロンドン自然史博物館でも、2013年に開催された。同展では、245点のモノクロ作品で、気候変動の影響によって、生命を脅かされている先住民族や野生生物、環境破壊の危機にさらされている土地や海域を紹介しており、多くの人々に地球的規模で進む気候変動と環境破壊に関心をもってもらうことがねらいとなっていた。

会期：2013年4月11日～9月8日。同展の他の主な巡回先：ロイヤル・オンタリオ博物館、シンガポール国立博物館、ストックホルム写真美術館、ニューヨーク国際写真センター(2014年9月19日～2015年1月11日)など。

Sebastiao Salgado: Genesis.

Natural History Museum, London.

<http://www.nhm.ac.uk/about-us/news/2013/april/>

salgado-exhibition-opens-at-the-natural-history-museum120498.html

ピーボディ自然史博物館で、気候変動展を開催

気候変動は、世界各地の環境保護団体だけでなく、ようやく各国政府にもその深刻な問題を認識させ、博物館でも関心が高いテーマとして取り上げられてきている。米エール大学のピーボディ自然史博物館で開催された気候変動展は、気候変動・温暖化を地球的視点としてとりあげつつ、身近な問題として取り上げていた。同展では、「地球の温暖化問題は私たちの視線にあわせて考える必要がある。地球の温暖化がわたしたちの生活や生き方に対してどのような因果関係があるのかについて、考えて欲しい」（同展を企画したデービッド・スケリー教授）が、展覧会を見にくる人へのメッセージとしていた。

会期：2012年12月2日～2013年2月24日。

Seasons of Change: Global Warming in Your Backyard.
Yale Peabody Museum of Natural History, New Haven.
<http://peabody.yale.edu/exhibits/seasons-change>

<http://www.yalescientific.org/2013/02/seasons-of-change-a-local-look-at-climate-change/>

国立アメリカ先住民族博物館で、気候変動展を開催

アメリカの首都ワシントンの中心部に2004年9月21日に開館した国立アメリカ先住民族博物館は、北米の先住民族の文化だけでなく、広く中南米の先住民族の文化を紹介し、多くの民族学資料を収集している。従来の展覧会も、民族学的なテーマが多かったが、近年になって先住民族の伝統的な科学をテーマにした展覧会の企画にも着手した。2011年夏から翌年の1月の始めまで開催した「地球との対話：気候変動についての先住民族の声」は、そうした一連の企画の第1弾として位置づけられている。同展では、地球の温暖化が先住民族の生活圏にどのような影響を与えているかを明らかにしつつ、公害が環境に及ぼす影響に力点にも置かれており、極地圏で進む公害防止法の緩和が現地の住民に深刻な影響を与えていること等も取り上げている。北は極地圏のみならず、南はブラジルまでの先住民族からの問題提起を「声」として訴えている。

会期：2011年7月22日～2012年1月2日。

Conversation with the Earth: Indigenous Voices on Climate Change.

National Museum of the American Indian, Washington DC.

<http://www.si.edu/Exhibitions/Details/Conversations-with-the-Earth-Indigenous-Voices-on-Climate-Change--4647>

ボストン科学博物館で、気候変動展（写真展）を開催

アメリカのゲイリー・ブラーシュ（1944年生まれ）は、自然と野生生物の写真を撮る写真家として知られ、アンセル・アダムズ賞等を受賞している世界的な写真家のひとりだ。ブラーシュは1999年より環境問題や気候変動をテーマに撮り続けており、そのシリーズは「World View of Global Warming」というプロジェクトに集約されている。このプロジェクトの一環として、ブラーシュによる気候変動をテーマにした写真展がボストン科学博物館での開催を皮切りに巡回が始まった。同展は、1999年から2012年までの間に写した写真の大型作品100点で構成されている。

会期：2013年6月22日～2014年1月2日。

Climate Change in Our World.

<http://www.worldviewofglobalwarming.org/pages/exhibit.php>

http://www.mos.org/sites/dev-elvis.mos.org/files/docs/advancement/mos_magazine_fall-2013.pdf

■ その他の企画展・特別展

大英図書館で、北西航路探検誌展を開催

会期：2014年11月14日～2015年3月29日。

Lines in the Ice: Seeking the Northwest Passage.

<http://www.bl.uk/whatson/exhibitions/lines-in-the-ice/>

ニューヨーク植物園で、屋外鉄道模型展を開催

会期：2014年11月15日～2015年1月19日。

Holiday Train Show.

<http://www.nybg.org/exhibitions/2014/holiday-train-show/index.php>

トリニティ大学科学館（ダブリン）で、「うまく失敗する」展を開催

会期：2014年2月7日～4月27日。

Fail Better.

<https://dublin.sciencegallery.com/failbetter>

9月10月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
郡山市ふれあい科学館	スペースパーク企画展「見て聞いて、さわって感じよう!～感覚体感フィールド」	12月6日～1月12日
	ホワイエ企画展「いろいろな光で見た宇宙」	11月1日～12月30日
ミュージアムパーク 茨城県自然博物館	開館20周年記念企画展「新茨城風土記～ひとと自然のものがたり～」	7月12日～11月24日
	第62回企画展「マンモスが渡った橋 -氷河期の動物大移動-」	12月20日～6月7日
群馬県立自然史博物館	第47回企画展「闇夜の動物たち」	10月4日～11月30日
群馬県立ぐんま昆虫の森	第9回ぐんま昆虫の森「虫の絵」作品展	11月1日～12月26日
埼玉県立自然の博物館	企画展「カラフル昆虫記」	11月8日～2月22日
千葉県立中央博物館	「どんぐりの世界」	11月1日～12月14日
国立科学博物館	企画展「ヨシモトコレクションの世界」	10月15日～1月18日
	特別展「ヒカリ展 光のふしぎ、未知の輝きに迫る!」	10月28日～2月22日
郵政博物館	通信～郵政建築展-吉田鉄郎の作品にみるその源流と発展-	9月13日～12月14日
多摩六都科学館	ペーパークラフト動物園(仮)	11月22日～12月7日
東芝未来科学館	企画展「東芝が推進する教育ICT導入 みらいの教室展」	9月9日～1月31日
新江ノ島水族館	企画展「文化に根ざした魚たち」	11月1日～11月30日
	11月テーマ水槽「七五三～子どもたちの成長を祝う～」	11月1日～11月30日
	デンモウナギのECOツリー点灯	11月1日～12月25日
	12月テーマ水槽「クリスマス キリストと生き物たち」	12月1日～12月25日
	幻想的なクラゲのグラスツリー	12月1日～12月25日
立山カルデラ砂防博物館	特別展「立山温泉をめぐる人々と歴史」	10月4日～12月27日
富山市科学博物館	第35回SSP展「自然を楽しむ科学の眼2014-2015」	10月25日～11月30日
	第22回私の身近な自然展	12月13日～1月18日

開催館	展覧会名	開催期間
岐阜県博物館	特別展 里山いま昔 一人と自然 あらたな“絆”を求めて-	9月12日～11月16日
	発掘速報展 発掘された飛騨・美濃の歴史	11月22日～2月1日
	マイミュージアムギャラリー展示 平成26年度第5回展示 ふるさとを彫る～木版画の風景～	10月18日～11月24日
	マイミュージアムギャラリー展示 平成26年度第6回展示 家族で楽しめる「レンズ付きフィルム」コレクション	12月6日～1月18日
大垣市サイトピアセンター 学習館	南天の星空と皆既月食	9月27日～11月30日
中津川市鉱物博物館	第18回企画展「長島鉱物コレクション 寄贈50周年記念展」	11月1日～2月22日
豊橋市自然史博物館	企画展「毛皮～フラットスキン標本となったけものたち～」	11月15日～12月14日
	企画展「ダンボール・アニマルワールド in のんほいパーク」	11月21日～11月30日
	干支展 アンモーンの石	12月20日～1月18日
トヨタ産業技術記念館	開館20周年特別展「トヨタの進化 喜一郎の夢、その後…」	10月15日～12月14日
あいち健康の森健康科学 総合センター健康科学館	秋の特別展示 過去へ!世界へ!いざ 食べもの探検隊	9月13日～11月30日
滋賀県立琵琶湖博物館	企画展示 「魚米之郷(ぎょまいのさと) -太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし-」	7月19日～11月24日
鳥取県立博物館	流体-松本文仁/森田しのお展	11月15日～12月14日
島根県立三瓶自然館	冬の企画展「自然を楽しむ科学の眼」	12月6日～2月1日
岡山県生涯学習センター	企画展 「第76回岡山県児童生徒発明くふう展・2014岡山県未来の科学の夢絵画展」	12月12日～12月18日
倉敷市立自然史博物館	新着資料展2014	9月20日～12月27日
防府市青少年科学館	秋の企画展「究めて達人!は・か・る展」～きみは正確にはかれる?～	10月25日～12月7日
美祢市歴史民俗資料館	奈良東大寺の大仏と長登銅山跡	8月5日～11月23日
北九州市立自然史・ 歴史博物館	いのちのたび・イノベーションギャラリー共同開催 「メタルズ!～変容する金属の美～」	11月1日～12月23日
北九州イノベーション ギャラリー		
阿蘇火山博物館	古坊中の暮らし～阿蘇山信仰～	11月15日～3月29日
宮崎県総合博物館	特別展「どんぐりとまつぼっくり」	10月18日～12月7日

リニューアル情報

札幌市青少年科学館

[更新箇所] 宇宙・天文コーナー

[更新内容] これまでに設置していた「宇宙・天文」分野に「地学」分野の展示を加え、「天文・地球科学コーナー」として新たに整備。直径20メートル、高さ4メートルのドーム正面側に日本を中心とした地球北半球の衛星写真を展開。背面に地球の進化史を語る紀元となる7つの時代を示し、時代ごとの出来事をパネルで紹介する。また、フロアを「宇宙ダイナミクス」「太陽系ダイナミクス」「地球ダイナミクス」「北海道ダイナミクス」の4つのテーマに分け、それぞれで体験型の展示を行う。

[公開日] 平成26年4月24日



群馬県立自然史博物館

[更新箇所] 博物館の入り口・常設展示室Bコーナー

[更新内容] 第46回企画展「むし 虫 ウォッチング2」で製作したカブトムシの100倍模型を博物館入り口に、アゲハの100倍模型を常設展示室Bコーナーにそれぞれ設置しました。体長4メートルのカブトムシが、入り口で来館者を迎えています。また、高さ3メートルのアゲハは、展示室の一段高い場所に設置しています。

[公開日] 平成26年7月19日



府中市郷土の森博物館

[更新箇所] 常設展示室

[更新内容] 27年の時を経て、ついに常設展示室が生まれ変わりました! 博物館開設以来、初めての全面リニューアルです。平成22年4月に「くらやみ祭」「こども歴史街道」「体験ステーション」のリニューアルが一部先行公開する形で始まりましたが、今回は新たに6コーナーを改修して、グランドオープンとなります。奈良・平安時代の国府、江戸時代の宿場町をはじめ、府中の歩んできた特色ある歴史、多摩川や浅間山の自然を、豊富な実物資料と模型、ジオラマを通してわかりやすく紹介します。

[公開日] 平成26年10月4日



第22回研究発表大会

事例発表者の募集について

平成27年2月27日(金)に札幌市青少年科学館で開催する第22回研究発表大会での事例発表者を募集します。今回の大会テーマは「科学技術が信頼されるために科学系博物館は何をすべきかー社会教育行政再構築の担い手としてー」です。活発な情報交換の場となるよう自館の取り組みや課題など是非ご紹介ください。

応募は口頭発表、ポスター発表とも11月26日(水)までに、事務局宛メールかFAXでお申し込みください。詳しくは10月14日付けで各加盟館宛にお送りしました要項をご覧ください。(全科協HP<<http://jcsn.jp/>>でも募集要項をご覧ください)。

皆さまの応募をお待ちしています。

平成27年度巡回展開催館追加募集

国立科学博物館製作の巡回展について、開催館を追加募集いたします。
ご希望がありましたら、事務局宛メール等でご連絡ください。

①ノーベル賞を受賞した日本の科学者

貸出可能期間：平成27年1月～9月、12月以降



※貸出可能期間は目安です。
実際の貸出期間についてはご相談の上、決定させていただきます。

②日本の生物多様性とその保全

貸出可能期間：平成27年4月～5月中旬、7月、10月以降



編集後記

秋も終わりにさしかかり、読書には最適な季節となりましたが、日々の仕事に追われなかなか本を開く時間が取れないという方も多いのではないのでしょうか。11月1日発行号の全科協ニュースではここ数年、幅広い分野の方々から、科学にまつわる本を紹介いただいています。集まった原稿を読んでいると、つついあの本もこの本も読んでみたいと横道にそれて行きそうになります。全科協ニュースをきっかけに、いつもの読書+αで本を読んでいただければ幸いです。

さて、今年度より新たに3名の方に編集委員に加わっていただきました。また、事務局にも担当職員が1名加わりましたので、今後も皆様に役立つ情報を発信していきたいと思えます。こんなテーマを取り扱って欲しいなど皆様からのご意見も随時募集しています！

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

大島 光春(神奈川県立生命の星地球博物館主任学芸員)
杓名 貴彦(国立科学博物館理工学研究部研究員)
佐久間大輔(大阪市立自然史博物館学芸課学芸員)
田代 英俊(公益財団法人日本科学技術振興財団
経営企画室グループリーダー)
中井 紗織(科学技術振興機構理数学習推進部教員支援グループ)
畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
平濱美紀子(ディスカバリーパーク焼津主任主査)
高尾 敏史(国立科学博物館事業推進部連携協力課長)

全科協事務局

国立科学博物館 事業推進部 連携協力課
(担当：園山、飯岡、中島)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcsm.jp
発行日 平成26年11月1日
発行 全国科学博物館協議会◎
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社